

身近なところから始めよう

12月は

地球温暖化防止月間



地球温暖化の影響と見られる気候変動が深刻化しており、近い将来、地球上のあらゆる生命に危機をもたらすことが予想されています。

世界全体で考えたと実感がわかないかと思いますが、一人一人の行動の積み重ねが二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を抑制し、温暖化の食い止めに役立ちます。

「地球温暖化防止月間」をきっかけに一人一人がさらに何ができるか、地球温暖化について考えてみましょう。

環境防災課

☎84-0314

やさしい行動です。

エアコンでは

- ・暖房は20℃、冷房は28℃を目安に温度設定する。
- ・また、不必要につけっぱなしにしない。
- ・電気カーペットの温度設定はこまめに調整する。
- ・不要な照明はこまめに消灯する。
- ・こたつは敷布団と掛け布団を使用し、こまめに温度調節をする。

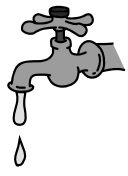


キッチンでは

- ・冷蔵庫にものを詰め込みすぎない。
- ・冷蔵庫は壁から適切な距離をあけて設置する。
- ・電気ポットは長時間使わないうときはプラグを抜く。

浴室・洗面所・トイレでは

- ・洗濯をするときは、まとめて洗うようにする。
- ・使わない水はこまめに止める。
- ・風呂は間隔を空けずに入る。
- ・便座暖房を使わないときはふたを閉め、温度設定をこまめに調整する。



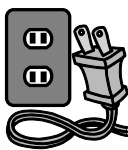
車に乗る場合は

- ・車のアイドリングはできる限りしない。
- ・車は急発進、急加速をしない。
- ・タイヤの空気圧は適正に保つ。



家電の使用・購入は

- ・家電製品を使わないときは、コンセントからプラグを抜く。
- ・家電製品を買うときはエネルギー効率のよいものを選ぶ。



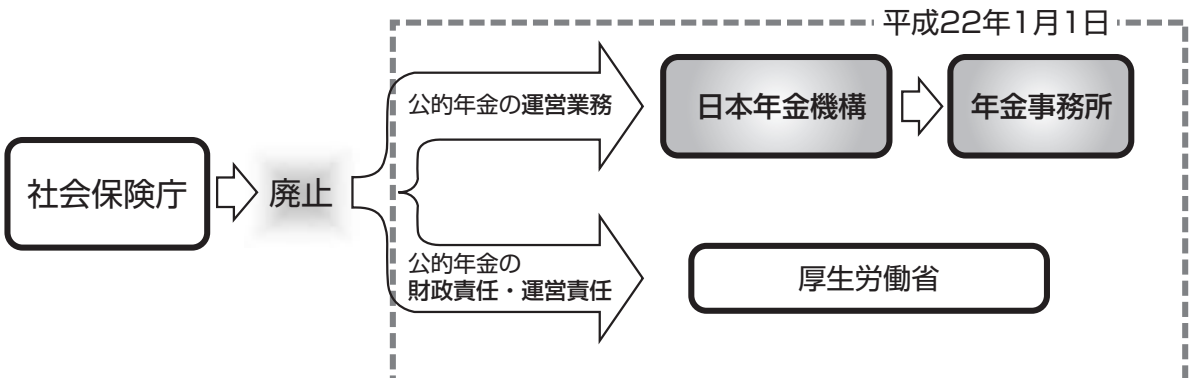
※地球温暖化防止に役立つ省エネ家計簿を15ページでお知らせしています。

社会保険庁は1月1日から「日本年金機構」に生まれ変わります

国民の皆様の信頼に応え、一層のサービス向上の実現をめざし、社会保険庁は組織・人員を一新し、「日本年金機構」がスタートします。

現在ある近くの社会保険事務所は、「年金事務所」へと名称が変わりますが、年金相談などの窓口として引き続きご利用いただけます。日本年金機構は、社会保険庁から公的年金の運営業務を引き継いで行うこととなりますが、公的年金制度は、国の制度として、その財源や運営に国が引き続き責任を持つことについては、これまでと変わりません。

☎045-65012001



特派員レポート

おひさまがなつめをまど 開成町のいちごづくり



開成町は、昔からの特産物として、なし、米などがありますが、ケーキやデザートなどでおなじみの「いちご」もそのひとつです。

俳句ではいちごの季語は夏ですが、最近では11月から6月ごろまで店頭で見かけるようになりまして。

して導入されましたが、病害虫やねずみの被害、戦時中の一時中断など、多くの苦労がありました。戦後、再び栽培技術の改良、種苗育成、品質検査の強化などさまざまな方策を講ずるも、昭和40年代に入りだんだんと組合員は減少しました。

昭和20年代は石垣栽培

あしがらいちご組合（南足柄市、大井町、山北町、開成町で構成）組合長の末藤寛さん（下延沢）と元組合長の辻村晃治さん（下島）に栽培方法やいちごづくりの苦労話などの今昔物語を取材しました。

まちづくり情報特派員

長廣 安彦

辻村さんに聞きました！

先人たちの歴史や思い出
始めは水田の裏作として

いちごの栽培は、昭和6年に、足柄平野に水田の裏作と

当時東京市場への出荷でしたが、20〜50箱を麻縄でまとめ、早朝からトラックではなく小田急線と東海道線で、人力で運びました。市場では「吉田島陽熟イチゴ」として高い評価を得て、有名なケーキ店や果物店から大変喜ばれたそうです。

末藤さんに聞きました！
ハウス棟での栽培
ハウス栽培で試行錯誤
昭和39年に現在のハウス栽培に取り組み、栽培技術、新品種の導入など行い大きな効果をあげることができました。石垣栽培と違い、同じ場所での栽培のため、親株の確保、育苗、土壌管理、かん水、温度管理、ミツバチの放飼、粘着テープによる防虫など、いろいろ試行錯誤しながら品質や増収などの技術を習得しました。

小学生の体験学習

平成18年に開成小学校3年生が体験学習で、ハウス内を見学する機会がありました。子どもたちは学校の授業だけでなく、自分で図書室やインターネットなどで調べた予備知識がありました。思った以上のハウスの暑さを体感したり、赤く色づいたいちごを取ったり、楽しそうに笑顔が印象的でした。

この体験学習で、子どもたちにはいちご栽培の年間作業を説明しましたが、後日、小学生から感想文が届き、ふだん何気なく口に入っているだけで

なく、いちご栽培にも興味をもってくれたことを読み取ることができました。また、この体験学習を通して地域の子どもたちとあいさつを交わすようになり、貴重な体験となったそうです。

小学校給食の食材として

2月下旬から3月上旬には、地産地消として小学校給食の食材に利用していただいています。

また、農協女性部でジャムに加工してあじさい祭などで無添加商品として販売し、地元の人だけでなく観光客からもおいしいと好評を得ています。

今後の課題

末藤さんに、今後のいちご栽培をどのようにお考えですかと伺うと「安全で魅力ある農業をめざしているが、必要不可欠な土作りや、組合員が減少するなどの後継者不足、自然環境の変化による病害虫の発生、苗の確保などさまざまな問題がある。共助の心がけで改良したい」と語ってくださいました。

また、「いちご栽培の面白



ハウス内でほほえむ末藤さん

取材を通じて
生産者の方とお話することで、日ごろ私たちがおいしく食べているいちごは、気持ちよく育てられていることがわかりました。これからも私たちにおいしいいちごを栽培してください。